

環境創造型農業の支援技術開発

兵庫県では農業の自然循環機能の維持推進を図り、環境への負荷を軽減するため、化学的に合成された肥料及び農薬の使用を慣行栽培の30%以上低減する生産方式の環境創造型農業を推進しています。

今回、特集で『環境創造型農業の支援技術開発』として、イチゴのうどんこ病防除の特定防除資材である重曹の有効性の事例。兵庫県の特産である丹波黒大豆に対して、DNAマーカーを利用した茎疫病抵抗性系統とSMV抵抗性系統を選抜育成した技術開発と亜リン酸肥料施用技術による連作障害の軽減

と増収効果の確認の2事例。淡路地域特産のレタス、ハクサイ、キャベツに対して、亜リン酸粒状肥料を使った健苗育成と生育促進効果の事例。また、ハウス栽培における有機栽培と慣行栽培を比較して、ホウレンソウとコマツナの養分含有率で有機農業の優位性の確認。以上の5事例を紹介します。

これまで取り組んできた環境創造型農業に関係する個々の技術紹介ですが、今後の営農体系を考える上の一助になれば幸いです。

山下 賢一（環境・病害虫部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-2419）

重曹を用いてイチゴの化学農薬散布を半減

イチゴのうどんこ病は重要な病害であり、防除のために化学農薬が多用される傾向が強い。特定防除資材として重曹を防除体系に組み入れ、化学農薬の使用回数を半減することができた。

内 容

2009年12月11日から2010年4月2日までの発病果率と慣行区及び重曹区での化学農薬及び重曹の散布日を図に示した。重曹は発病果率5%の時点で800倍（展着剤1,000倍加用）で散布した（図）。その結果、重曹区では、うどんこ病の発病果率をおよそ10%以下に抑えることができ、処理開始から3月末まで化学農薬散布4回のところ2回の散布で実

用的な効果を得ることができた。

普及上の注意事項

重曹は治療効果しかない。多発生してからは防除が難しいため、少発生うちに散布する。

松浦 克成（環境・病害虫部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

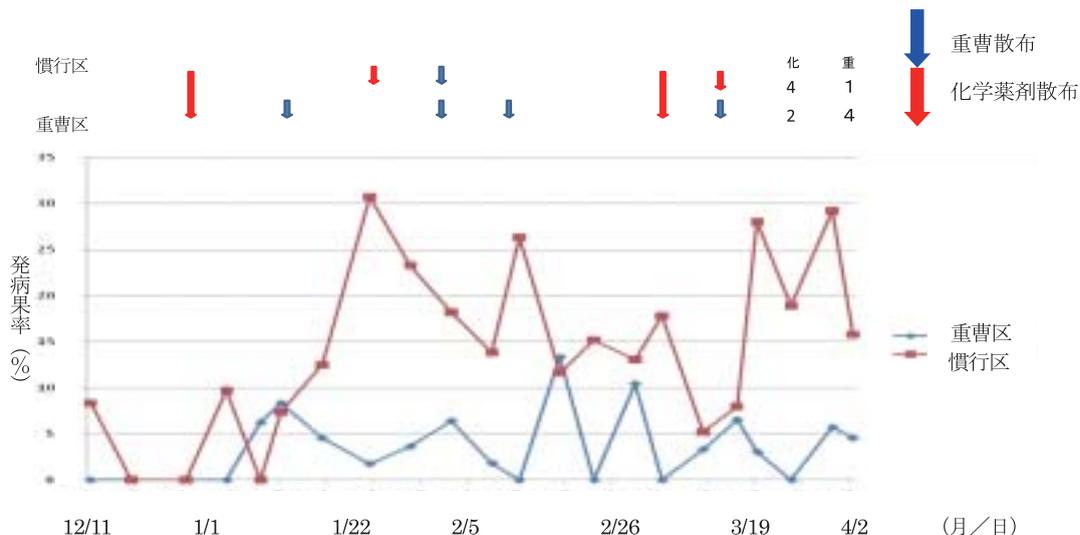


図 重曹を組み入れた防除によるイチゴうどんこ病発病果率への影響